

# 認知症地域支援体制構築等推進事業

名張市における

1. 現在の取り組み状況
2. これからの取り組み事項



## 1. 現在の取り組み状況

地域ぐるみの取り組みに向けて

2 地区選定とそれぞれの取り組み状況

センター方式研修(事業所向け研修)

認知症介護研究・研修東京センター

主任研究主幹 永田 久美子 氏

高齢者実態調査

ごみ出しなどの地域ニーズの把握

# 地域ぐるみの取り組みに向けて

## 地域の選定と各アプローチの方法

### 薦原地区(農山村地域)

認知症予防のツールとしての散歩マップ ~ 回想による認知症予防  
地域の保健委員と協働し、地域住民にとって、馴染みのある場所に  
触れることのできるルートを選定し、マップを作成する。(また地  
域外の人たちにもその地域を知ってもらおう契機として活用する。)

### すずらん台地区(住宅団地)

地域福祉活動のツールとしての資源マップ ~ 身近な資源に気づく  
地域の高齢者が集う場所、福祉・医療施設、商店・食堂、交通機  
関、関係機関、ボランティア活動拠点など地域住民とともに再確認  
し、マップを作成する。

# 地域に入って見えてきたこと

(すずらん台地区の例より)

## 地域住民の参画を得ることが想像以上に困難であった

- ~ 提案1「認知症に対して地域で取り組めることを一緒に考えてみませんか」  
「地域ができることのイメージが出来ない」  
「そもそも地域役員自身も認知症に対する理解が不足している。まずは、そこから」
- ~ 提案2「資源マップを作成してみませんか」  
「地域資源の確認より要援護者の把握が課題」
- ~ 提案3「それでは、認知症を理解するための巡回講座を各集会所ごとで開催したい」  
「認知症で地域に呼びかけても人は集まらない。まずは、地域役員向けにどう  
いったことをするのか見せてほしい」

以上のことから

認知症理解のための講座を開催

まずは、地域役員向けに2回(平日、日曜日)

対象:地区社協役員、自治会班長

(講座の内容)

DVD「認知症100万人キャラバン」(15分)

講演:三重県立看護大学 伊藤薫先生(40分)

寸劇:「認知症の人を地域で見守ろう」(15分)

質疑応答

2回開催の反応を踏まえ、地域住民向けに開催予定

地域ボランティア(散歩隊)3周年記念行事の際に開催  
する予定

講演風景 三重県立看護大学 伊藤薫先生



「認知症について」「ある男性介護者の体験から学ぶ」「認知症サポーターへのメッセージ」  
～ 非常にわかりやすい講演内容であり、みなさん熱心に受講いただいています。

## 寸劇風景 劇団☆ともこ組。



劇団☆ともこ組。とは、

地域包括支援センター及び保健センター職員の精鋭から選りすぐられた演劇に命をかけた勇者たちの集団である。吉本新喜劇にそのルーツを持つ舞台は地域住民にも好意的に受け入れられたのであった。

(ともこ組。の「とも」は友達の友です。(命名:地域包括センター長))

- すずらん台地区においては、本年度、地域住民の認知症に対する理解を育むことに力点をおくことになるが、次年度以降、この理解が冷めないタイミングで、地域ぐるみの取り組みに向けての働きかけをおこなっていきたい。
- 具体的には、地域役員を中心に地域では何が必要で、何が出来るのかを考える場の設定をおこなっていく。
- 特に、名張市においては、ごみの分別化が細分化され、ごみ出しに関する住民間のトラブルも報告されている。認知症ゆえのトラブルの発生も容易に想定される。
- これに対し、地域で何か出来ないかと投げかけることから、はじめてはどうかと考えている。

## ② センター方式研修

認知症介護研究・研修東京センター 主任研究主幹 永田久美子氏による



### (第1回目)

各自の認知症高齢者への介護体験や相談対応をもとに、身近にいる認知症高齢者についてグループ討議



### (第2回目)

地域別グループ討議では、地域の資源を洗い出し「いろんな発見があった」との感想も

## センター方式研修内容

### (第1回) 身近にいる認知症高齢者を考える

認知症について学ぶとともに、今までの経験を振り返り、認知症ケアのあり方を議論する。

### (第2回) 地域に目を向けてみる

「高齢者が集まっているファミリーレストラン」「スーパーの中にある高齢者が寛ぐベンチ」などそれぞれが地域に目を向け、身近にある資源を再確認。個別のケアで支えるだけでなく、地域の資源を活用し、地域で支える視点の大切さを学ぶ。

### (第3回) センター方式を使って考えてみる

地域包括支援センター、ケアマネ事業所、グループホームから一例ずつセンター方式を用いてアセスメントし、事例発表。センター方式を实际使ってみてみんなで学ぶ。センター方式を身近に感じる。

## 今後について

本年度において永田先生によるセンター方式の研修は終了するが、事業所に対しては引き続き

地域に目を向けること、並びに地域資源の周知とその積極的活用について働きかけをおこなっていく必要があると考える。具体的には、事業所連絡会を通じての情報提供と研修の実施をおこなっていく予定ある。

また、センター方式の活用について、定期的にセンター方式を用いた事例検討会を開催していく予定である。

ただし、今まで永田先生にリードしていただいていた研修を今後、職員でどう組み立てていくのかが課題としてあげられる。

## 高齢者実態調査

民生委員による戸別訪問(実態把握) 10月～12月

対象:70歳以上のひとり暮らし、75歳以上の高齢者世帯等

聴取内容:近隣からの支援内容(買い物、ゴミだし等)

ごみ分別、ごみ出しの可否 等

地域へのフィードバック

高齢者のニーズ、特にごみ出し支援に対するニーズを把握し、それを地域に示したうえで、どのように支援活動へと結びつけるかが課題となっている。

認知症高齢者に対する地域の取り組みは、ごみ出し支援をきっかけに広げていきたいと考えている。

## 2. これからの取り組み事項

### 認知症サポーター養成講座

- ・市職員向けサポーター養成講座の開催

各関係機関に働きかける前にまずは自ら

- ・教材の開発(講演資料、映像資料、紙芝居など)

まちの保健室職員が地域において少人数単位での講座を開催できるツールをつくる。

### 児童向け啓発教材の開発

- ・県立看護大学の協力のもと、児童書の紹介冊子を作成

- ・児童向け紙芝居の作成

### 認知症フェアの開催

- ・より多くの市民が認知症について考えるきっかけとなるイベントを企画中